

Narashino International Association



Narashino International Association

NIA SQUARE ファウエア

Quarterly News

第64号

2003年12月1日
習志野市国際交流協会

- Special 砂漠の国サウジアラビア
- What's New 「神々の火花」は両国民の間に輝いた
- Report 中 国 駐 在
- Report N.I.A. 事 業 報 告

- N.I.A Youth 富士山バスツアーノ
- Who's who こんにちわ・コンニチワ
- Challenge ザ・英文クロスワード

さばくくに 砂漠の国サウジアラビア(イスラムの地にて)

ひろせ よしこ
廣瀬 祥子
(鷺沼在住)

サウジへの第一歩

首都リヤドに到着。その国際空港で子どもを連れて走っているスカート姿の日本人。周囲の人達には、さぞ異様な光景に映ったのでしょう。日本では受けたことのない視線を感じました。今思えば滞在中、走るアラビア人の姿を目撃することはありませんでした。しかし、私が視線を浴びていた理由は、それだけではなかったようです。女性が肌や髪を人前にさらすということは、敬虔なイスラムの国、サウジアラビアでは考えられないことだったのです。直後、お出迎えを受けた前任者の奥様方に早速黒いマントを着せていただくことになり、私のアバヤ(黒いマント)生活はスタートしたのです。

サラー

サウジの生活は、このサラー(お祈り)を抜きに語ることは出来ません。モスリム(イスラム教徒)でない私たちがお祈りすることはありませんが、日常生活のあらゆる場面で影響を受けたことは確かです。イスラム教の6つの教えの中の一つがお祈りです。毎日少しづつ変わる1日5回のサラーの時間になると、その時間を知らせるアザーンが、響き渡ります。それを合図に入人々はモスクに集まり、店は一斉に閉まります。外出する時にはサラータイムを確認してからでないと、とても効率が悪くなります。(午後は昼休みをとる店がほとんどなので、24時間営業のスーパーを除いては買い物は不可能に近いです。)店内の照明が一気に消され、買い物の途中でも外に出されます。店によっては店内にいることが許される場合もありますが、鍵をかけて店員が引き上げてしまうのでサラータイムが終わり、店員が戻ってくるまで店か

ら出ることは出来ません。モスクは、町内ごとにあるようで、どこでも、いつでもお祈りできるようですが、モスクには男性モスリムしか入ることは出来ません。お祈りは、モスクの中だけに限られることではなく、道端でも、病院の待合室でも、離着陸中の飛行機の中でも目にしたことがあります。(お祈りの最中に携帯電話が鳴り、途中でいなくなってしまう人もいましたが。)

スーパーやデパートには、簡易モスクのような男女別のお祈りの部屋が設けられていました。お祈りの前になると手足を洗い清めるのでトイレはいつも水浸しでした。

制約

イスラムの戒律を厳しく守るこの国で生活していくために、禁止されている事項がいくつかありました。
まずアルコール。これを含んだ食べ物(御菓子等)はもちろんのこと、料理にも使うことが禁止されています。日本製の醤油は売られていましたが、東南アジアで作られたみりんの入っていないさらさらしたものでした。ビールはノンアルコールのもの。乾杯はサウジシャンパン(りんごジュースを炭酸水で割った果実入りのジュース)で行われました。

そして豚肉。シューマイなどの豚肉製品はもちろん、カップラーメンにも使われていないようでした。写真撮影についても、かなり注意が必要でした。警察に見つかった場合には、フィルムもしくはカメラを没収、通行もあり得るということでした。人気のない砂漠のような場所や家の中では問題はないのですが、市内での撮影、空港、モスク、特に女性に対しては、カメラを向けること

はつと はし
はご法度。走る車の中からこっそりレンズを向けたこともありました。かなりの緊張の中でシャッターを押したこと覚えています。(運転をしていた主人の方が緊張していたようですが。)なので日本では目にすることのない珍しい街の様子もアラビア人の姿もカメラに収めることはほとんど出来ませんでした。にもかかわらず、街中には写真屋は、数多くありました。

アルコールや女性の姿は、雑誌の中でも厳しく規制されていました。外国から入ってくる雑誌等は情報省といふところで検閲され、不適切と判断された広告は切り取られるか、マジックで消されています。女性の素足、腕や胸元は、どの雑誌をめくっても黒く塗りつぶされていました。

また、家族以外の男女が、行動をともにすることもありません。が、男性同士は手をつないで歩いている姿はみかけました。(警備員も腕を組んで巡回していました。)男性の服装については厳しくないようでしたが、半ズボンの人は見かけませんでした。サウジの男性は、ディスター・シャという足首までのながさがあるYシャツのような白い服、頭にはゴドラ(紅白のスカーフ)とイカール(黒い輪)という姿が一般的でした。

シングルとファミリー

街中には、日本でもおなじみのファーストフードやカフェが至る所に見られます。ピザのデリバリーもありますが、オートバイではなく車での配達になります。アラビア料理のファーストフード店は、安くおいしく労働



シャナドリア祭 パンを作る人

者等に人気です。子どもが一緒にいくと必ずサービスしてもらいますが、女性が店に入る事は出来ませんでした。

外資系のファーストフード店の入り口は2つあり、男性だけが入る事が出来るシングルセクション、家族や女性同伴の時の入り口は、ファミリーセクションです。ファミリーセクションは、中の様子が、外から見えないよ

うになっていて、さらに座席一つごとにカーテンやついたてがついていて仕切られるようになっています。女性は、食事をする姿を見せるべきでないというイスラムの教えを守る大切なシステムのひとつが、ここにもありました。

イスラム文化と女性

単独での外出禁止、車の運転の禁止、就労の禁止(医師、教員などは、認められています。)アバヤの着用など女性に対する制限はさらに多くなります。アバヤを身につけることに気が重くなったこともあります。アラビアの女性は、アバヤだけでなくスカーフで髪を、フェイスマスクで顔を覆い、目だけを出していることが多いのです。密度の濃い睫毛と大きな瞳、どきっとするほどです。中には全身を黒く覆ってしまっている人もいて、これには子どもたちも驚いていました。



ジャナドリア祭 祭り会場(馬車に乗った娘たち)

私達外国人は、アバヤのみで髪や顔を隠すことはほとんどありませんでしたが、スカーフを肩にかけておくことは、欠かせませんでした。ムタワ(宗教警察)が巡回している時があり、髪を出したまま歩いていると注意を受けます。女性本人が注意を受けることは少なく、そばにいる主人が文句の一切を引き受ける羽目になります。もしムタワに反抗した場合は、警察に引き渡され連行されるそうです。このムタワの存在もやっかいでしたが、何よりも自分のペースで自分の好きなように過ごすことが出来ないというのには参りました。イスラムの教えの中で女性を守るために解釈なのかもしれません、日本で自由に過ごしていた私にとっては、かなり応えました。アラビアの女性は、どのように日々を過ごしているのでしょうか。

気候と洗濯

4月上旬の着任時には想像していた暑さではありませんでした。しかし5月には、40度を超え、6月には連日50

度近くになりました。「50度を超えると官庁や企業は休業になる。」という話を耳にしましたが、さすがに休むわけにはいかないのか、新聞発表はいつも49度でした。室内のクーラーは、24時間つけっぱなしでした。肌が焦げそうなほど日差しでしたが、つなぐ手がパチパチするほど湿度が低いので体感的にはそんなに高く感じません。汗も流れることなくその場で蒸発していました。そんな天気が続くので洗濯にはもってこいです。強すぎる紫外線と埃で外にほすことはできないのですが、数時間でパリパリに乾いてしまいます。雨は、4月に見てから11月まで目にすることはありませんでしたが、季節の変わり目になると雷を伴った強い雨が短時間降ります。

アラビア人と月

日差しが強く日中の気温が高くなるこの国は、太陽が出ている間の街はとても静かです。営業時間が午前中と夕方から深夜までという店がほとんどということも影響しているのだと思いますが、まるで太陽をさけるかのように生活しています。最終のサーがおわると、広い駐車場がいっぱいになるほどスーパーは混み合い、市を中心部へ向かう道路は渋滞です。幹線道路沿いにウォーキングコースらしきものがあり、男性も女性も淡々と歩いています。服装はいつものようにディスカウントアバヤです。また、土漠（リヤド周辺では、砂というよりゴツゴツした地が続いていました。）では、月明かりの下で宴会が行われています。総合をひき、アラビックコー



Edge of the world

ヒーを飲みながらの語らいが続くそうです。ベドウィン生活の名残の一つなのかも知れません。

リヤドの街と観光

サウジアラビアという国は、観光で入国することはほとんど出来ない上に、得られる情報も限られます。生活していく中ですべてが珍しく、日常の体験さえも特別なものを感じる時もあります。市内には博物館がありますが、家族で入れる日が限られている上に、許可証を得て



ディライヤ遺跡

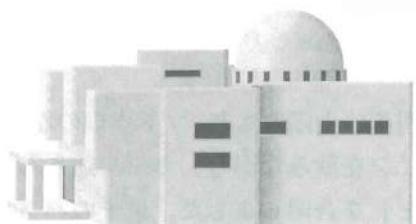
からでないと入ることが出来ません。市の中心部にランドマーク的存在の2つの高い建物（約300メートル）があります。そのうちの一つの上層部は、展望室になっていて、市内を360度見渡すことが出来ます。そこから車で20分ほどのところに、18世紀後半の都、ディライヤ遺跡があります。

また、南西に車で1時間半、巨大な地層の間を走り抜けると真っ赤な砂が広がる「赤い砂漠」。北に1時間半の土漠走行のはてには「Edge of the world」と呼ばれる絶景があります。途中の道では、らくだや羊を飼う遊牧民に会ったり、ワジ（涸れた川）を見かけたりと、テレビで見るような中東の景色に出会うことが出来ました。観光地として整備されている場所はないので、ありのままの姿を見ることが出来るのもサウジの魅力の一つなのかもしれません。

おわりに

初めての海外赴任がサウジアラビア。情報が少ないだけに不安の方が大きかったことも事実です。言葉にも自信がなく日々の生活を送るだけで精一杯でした。道を尋ねたら今から家に寄らないかと初対面の外国人にさえ気軽に声をかける青年。それ違う娘たちの頭をなでていくおじさんたち。面倒なことは、すべて「インシャーラー（神のみが知ることさ。）」と、思わず笑みがこぼれてしまうようなこともたくさんありました。

日本のよさを再認識し、外国の言葉や文化に興味を持つことが出来たのも私自身の大きな収穫です。変化にとんだ現代で変わらずに生活していくことの難しさというのも実感しました。



What's New / 「神々の火花」は両国市民の間に輝いた

さわ しげお
澤 滋夫
(袖ヶ浦在住)

「何時か日本からハインリッヒの生誕地を尋ねてこられるのを信じ、長い間、待っていました。今日、皆さんが此處に来られて、その甲斐があったと思っています」

カール・ハム氏（85才、第一次大戦中に習志野捕虜収容所に在住したハインリッヒ・ハムの甥）は述べた。本年8月24日、習志野第九合唱団有志34名（団長友野信義）は日本を出発し、フランクフルトを経てバスにてスタデッケン・エルスハイム市に向かった。8月26日はハム醸造所（Weingut Hamm）を尋ねました。全員ハム家の人たちに迎えられ、自慢のワイン倉とぶどう酒を試飲し、白ぶどう酒とハム家の食事を中庭で楽しみました。

ワイン醸造の指導のため、明治政府の招請で来日したハインリッヒは大戦のため、ドイツ軍に参戦し、チナオで破れ、日本軍の捕虜となり、戦争中（4年間）は大部分を習志野捕虜収容所（現東習志野文教地区付近の3万平米）で過ごしました。帰国後、故郷（エルスハイム）、に帰郷し、ぶどうの栽培とぶどう酒の醸造のほか、在日中に覚えた音楽で、エルスハイム男性合唱団の団長をつとめました。彼は、在日中、音楽家ハンス・ミリエスに師事したのです。そして、ギターを自分で作るまでになり、いまも、そのギターはハム家の宝とされています。われわれが見たいというと、カールは家の中からそのギターを持ってきました。しげしげとながめ、中をみるとそこにはNarashinoと記載されているのを発見しました。



ハインリッヒ・ハム氏が作られたギター

明るい太陽のもと、ブドウ畑のなかの醸造所の中庭で、ワインを飲みながら、カール爺さんのために皆で「ふるさと」を合唱しました。息子のハンス夫妻（現当主）は

肩を寄せ合ってじっと聞き入っていました。帰りには、カール爺さんは、ひとりでバスまで我々をおり、見えなくなるまで手をふっていました。

翌27日、ライン川観光のあと、エルスハイム文化ホール（コンサート会場）に行きました。村の人たちは会場設営を一生懸命に行っていました。日暮れまでの間、人々の好意で、ワイン畠（ドイツ語ではワインの丘という）に案内されました。そこでは、ノパート・リックハードが建立したハインリッヒの記念碑があり、日当たりのよい、山の斜面のぶどう畠を守るように建っていました。男声合唱団が、青空と太陽の下で、素晴らしい声で合唱を聞かせてくれました。畠では、ぶどうの「食べ放題」でした。その旨かったこと。白い粉がまぶされたぶどうは本当に美味かったです。ワインを飲みながら、きれいなドイツの田舎の風景を見、友の歌をきいて本当にすばらしい気分にひたりました。おかげに、「ワインの女王」のカテリーナの参加もあって、大満足でした。



ぶどう畠にかかるて、素敵な男性合唱を

式典（ハインリッヒ・ハム生誕120周年記念）は、両国国歌演奏にはじまり、エルスハイム市のレーム市長の挨拶、習志野市長メッセージの披露および団長の挨拶・式典主催者の挨拶がおこなわれました。主催者のノパートは、尊敬するハインリッヒのために日本から来た訪問団にたいし、嬉し涙とともに感謝と歓迎のスピーチを行いました。旧捕虜の家族関係者も参列しました。

コンサートは、エルスハイム男性合唱団による合唱（シーベルト・リズマンのほか坂本豊編曲のシモツイ節）が披露されました。ついで、習志野合唱団による

「日本の四季の歌」(計10曲)をドイツ語と日本語で合唱(早春賦・さくら、ほたる、紅葉、冬の夜等)およびソロ(赤とんぼ・荒城の月等)がソプラノ・勝尾香、アルト・鈴木賀子、バリトン・田辺とおる(テナー・ボナート)ピアノ・谷田扶実子で披露されました。

休憩の間、直径4cmの極太ソーセージがだされ、みんなでぱくつきました。勿論ワインもだされました。そのとき、テンポのいい第九のメロディにのって、ドイツ婦人6名による、トルコのベリーダンスが披露され、そのお色気に男性は勿論、女性団員も大喜びでした。そこで出た言葉“Wunderbar!”。

クラシックの合唱曲が続いて披露されました。歌うのはエルスハイムの男性軍と習志野の精銳男性軍の合同演奏でした。曲目は「父母の家」(Das Elternhaus), 「森の泉」(Bruennelein im Walde), 「去り行く狩人」(Der Jaeger Abscheid)等の計5曲でした。

ドイツ人は体が大きく、声も人によってはすごく太く大きいので、一緒に歌っても、しっかり歌わない負けました。隣のドイツ人バリトンの大男は筆者に「日本人のドイツ語の歌は素晴らしい」と讃めてくれました。(ピアノ 谷田扶実子)

「第九交響曲第4楽章」が、最後に、両合唱団とドイツ女声団の参加で、80人による合唱が行われました。(指揮 ピーター・ホル、ソプラノ 勝尾香、アルト鈴木賀子、テナー ボナート バリトン田辺とおる)(ピアノ連弾 谷田扶実子・田中麻輝子)聴衆は現地および周辺のドイツ人および、日本総領事を含む在独日本人の方々計500人でした。テレビ報道陣、新聞社の人たちもみられました。合唱はホールに響きわたり、曲の終わりとともに、轟音にも似た拍手の渦でした。全員が立ち上がり、舞台に近づいて来るのが目に入りました。隣のドイツ人も汗だくになりながら満足そうでした。

男性合唱団、市長、カール、ハム夫人、捕虜家族関係者の皆さんと習志野合唱団のコンパが始まりました。筆者から、レーム市長が式典の冒頭で言われた「習志野との友好を深めたい」との話は帰国後「しかと荒木市長に伝える」ことを述べ、ついで「我々日本人には夢があった。それは、ドイツ語の歌を、ドイツで、ドイツ人と一緒に歌うことだ。」と述べると一斉の拍手がわきました。男性合唱団のデグリーフ団長は「自分たちも貯金して習志野にいって歌いたい」と挨拶をしました。レーム市長から習志野市にたいしてスタデッケン・エルスハイ

ム市の紋章盾のプレゼントがあり、合唱団からは持参したお土産を全員に差し上げました。楽しい宴はなかなか終わりませんでした。



カール・ハム氏と筆者

ヘルムート・シュミット(元ドイツ首相)はカールの従兄であり、カールはシュミット氏に手紙をおくり、コンサートに出席してほしいと依頼しました。親日家のシュミット元首相は返事をおくってきました。手紙の中で、シュミット氏は「残念ながら、自分はいま、耳が良くないので、出席はできない。しかし、日本からの、訪問は驚くべき史実だ。よろしく伝えてほしい」(ヘルムート・シュミット署名)とありました。

今回の訪独は1. 第一次大戦に遡る日独の関係とエピソードの史実 2. 性格も類似する両国民の関係のなかで、3. ベートーベン第九合唱とともに歌い友好をふかめたことに大きな意義を感じました。

我々は帰路「アルトハイデルベルグ」を観光した時、素敵な話を耳にしました。同市は前大戦で米軍の爆撃を受けなかった唯一の街だそうです。その理由は、米国首脳のなかに、昔、アルトハイデルベルグ大学で学んだことがある者がおり、彼らのつよい進言と提言により戦火を免れたとの話。国際交流の偉大さを改めて感じたしだいです。

2005年は日本の「ドイツ年」です。往年、ドイツ兵士捕虜収容所を擁した習志野市がその中でなにが出来るかは市民の課題だと思います。第九は最後に歓喜の歌をつぎの言葉で結んでいます。
「天上の楽園からきた乙女よ、歓喜よ、美しい神々の
ひばな 火花よ」

新長さんはご主人の2回の駐在に伴われ、合計すると約5年半の中国での生活を経験され、今春日本に戻られました。経済成長の著しい変化や脱北者駆け込み事件、世界を不安に陥れたSARS（重症急性呼吸器症候群）の真っ只中での生活をお話していただきました。

最初の駐在は1986年1月から1988年8月まで、瀋陽と北京での駐在でした。当時は外国人がするような習い事や娯楽があまりなく、四つの大学の留学生課を渡り歩き、中国語を習得しました。2回目の駐在は2000年8月から2003年5月まで北京での駐在でした。



1回目との大きな違いは小学生の長男がいたことです。中国駐在に連れてきた以上、親の責任として、「中国に来てよかった。」と子供自身が思えるように最大限の努力をしようと思いました。一番心配したのは海外での転校でしたが、北京日本人学校に挨拶に行った時、教頭先生が「ここでは全員が転校生です。何も心配することはありません。」と力強く言ってくださった言葉を今でも忘ることはできません。そして私自身が子供に何をしてやれるかを考え、学校の役員を引き受けたり、図書ボランティアとして学校で本の読み聞かせをしました。日本でやっていた習い事も継続させたいと思いました。日本でピアノを習っていたのですが、中国でも現地の先生についてレッスンを続けました。どのように教えてほしいか、先生と何度も話し合いました。細かいニュアンスも伝えることが出来、そういう時には中国語が話せてよかったですと痛感しました。やはり、駐在する国の言葉が使えるということは、大きな利点であると同時に、その国を見てくる部分が違います。

現在中国では「英語熱」が高まっています。日本や韓国でも確かに英語の勉強が熱心に行われていますが、気迫という点では中国が勝っているように思われます。要因として、共産主義一辺倒から、私営企業家の出現という変遷に見られるような、アメリカンドリームならぬチャイニーズドリームの成功者の存在があると考えます。

つまり英語を習得することが、世界最大人口のこの国において、熾烈な競争を勝ち抜いていく上で、人より一步上に行くための手段なのです。世界の覇者であるアメリカへの憧憬と、それによって支えられる留学願望が、益々英語熱に拍車をかけているのでしょう。これからの中の中国の変貌には空恐ろしいものさえ感じますが、日本ももっと切迫感を持って向上していくないと、中国はおそらくアジアの他の国々からも取り残され、アジアの王座を明け渡さなければならぬ日はそう遠くないかもしれません。



故宮を背にして（左から2人目）

北京の繁華街の街並みは一見するとまるで東京と変わらないように見えます。マクドナルド、スターバックス、イトーヨーカドー、そごうなど日本でも見慣れたお店や外国人が食事を楽しむ場所も増えてきましたが、一步裏道に足を踏み入れると、馬が糞を落としながら車を引いているような昔ながらの光景がまだまだ残っています。

コンビニエンスストアは上海には及びませんが、ずいぶん増えました。日本では多すぎるほどある自動販売機は、お菓子のものはありますが、たばこや飲料水のものは見かけません。普及していない原因として、まず防犯上の理由、それから中国の少額硬貨（最高額が日本円に換算して約15円）ということではないでしょうか。中華料理はまず安くて量が多い、そして最後においしいといったところでしょうか。香辛料を多く使った辛い中華、そしてエスニック料理を多く食べました。一口に

中華といつても、その種類は実に多いのですが、全体的にはかなり油っぽく、それを中国茶を飲むことにより分離しているような感じです。日本の中華料理店の味は、日本人好みに変えられていてまだあまり食べる気にはなりません。

野菜や魚もだんだんと種類が増えてきているとはいっても、日本に比べると少ないです。今回駐在した当初は、ごぼうやアボカドを見つけると喜んでいましたが、今では比較的手に入りやすくなりました。それから日本でもよく話題になる農薬のことは、やはりとても気になりました。



宫廷料理のレストラン（右から2人目）

そして、現在北京の街では生花が売られています。「花は間違いなく、この国の経済発展の象徴」と、フローラルアーティストのある方がおっしゃっていましたが、食べられない花を売るなど、十年前には外国人向けの店にほんの少しあっただけです。そして犬を散歩させていたる人を見ると、衣食住以外に目を向け始めた人たちの生活レベルの向上を垣間見た気がします。

日本でも大変なニュースとして扱われた北朝鮮の脱北者日本人学校駆け込み事件は、まさに長男が通う学校でのことでした。その日は定刻を過ぎても帰らないので心配していました。間もなく遅れて帰宅した息子が、興奮した面持ちで色々あったことを話してくれましたが、中国のメディアでは放送されず、詳細は夜の衛星放送の日本のニュースで知りました。学校からはその晩、明日の授業は通常通り、という連絡が回ってきました。この時期は大使館への駆け込み事件も相次いでいたので、とうとう学校へも来たのかと思いました。

その後SARSの騒ぎが起り、北京での生活の終わり近くは落ち着かない日々でした。3月下旬から4月の第一週の時点では、日本の報道で情報を得るという状況でした。第二週目からは、自分の腰の治療で通院していた

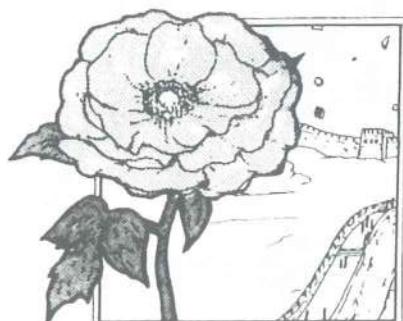
医師や看護士がマスクを付け出し、医療関係の日本人駐在員の家族が一時帰国し始めました。同じく医療関係の中国人の友人からの情報で、大変なことになっているらしい、と聞かされても日本からの情報とはやはりズレがありました。その後中国側の正式発表を受けてから、大使館および各企業が駐在員とその家族の感染予防の対応をすることになりました。「SARSに感染した場合、中国国内の医療機関で治してもらいます。」という大使館の発表を受け、人によってはかなり神経質になり、一歩も外へ出ないという人もいました。私たち家族はSARSが発生する前に帰国と決まっていたので、四月末に日本に戻りましたが、10日間の自宅待機をしました。

当初自分が考えていた駐在期間より一年ほど早かったのですが、対等に付き合える中国人の友達も出来、日本でもブームになっている中国茶、太極拳、水墨画等々、いろいろな習い事にも手を出し、漢方薬、中国式マッサージ、足ツボ、鍼治療など中国医学も体験したので、帰国するに当たり中国に未練はありませんでした。子供も、日本全国から来ていた日本の小学生、北京日本人学校の先生達、いろいろな国の人達、そしてたくさんの「出会いと別れ」を経験し、大きく成長してくれました。

現在、その息子は中国への思いを馳せながら、「水草舞」という中国の美しいピアノ曲を弾いています。



瀋陽にて（長男慶梧君と）



各部の活動、花盛り

今年度も後半を迎え、各部会の活動は、一段と活発になってきました。では、その活動（8月～10月）の様子をご紹介しましょう。

世界の平和を願って

習志野市では、毎年8月6日と9日の両日、広島・長崎の惨事を次代に伝え、世界の恒久平和を願うために和平記念式典を行っています。

今年度も被爆された方をはじめ、多くの市民の方々が参列され、厳粛な中、式典が行われました。本協会でも事務局が代表して両日出席、黙祷とともに献花を行い、世界の平和を祈念してまいりました。

来年は是非、多くの会員の皆様にご参加いただければと思います。



世界に平和を!!

日本語ボランティア養成講座が始まりました。

今年度も9月2日（火）より日本語ボランティア養成講座が、スタートしました。

この養成講座は、今年で8回目を迎えたが、相変わらず人気が高く、今回も応募された方が、募集人員を



楽しく学習しましょう！

はるかに超えました。そのため25名の受講生は、抽選で決められました。

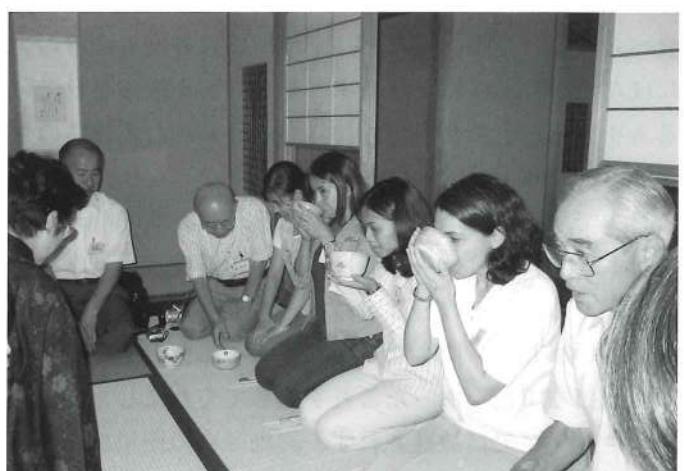
この講座は、手綱講師のもとで、30回、60時間をかけて行われ、12月16日（火）に修了する予定になっています。受講生のみなさんは、その後日本語ボランティアとして活躍されます。

「日本の心」にふれて感動！

比較文化部会主催の第1回日本文化セミナーが、9月13日（土）に開催されました。

今回のセミナーは「茶道をとおして、日本の心にふれてみよう。」というテーマで行われましたが、習志野市茶道協会（会長 天野 宗恭）の先生方の全面的なご協力をいただいたおかげで、参加された15名の方々は大満足。

当日は、サンロード5階にあるお茶室を使わせていただきましたが、外国の方々は、そのお茶室の雰囲気にまず感動！早速正座をし、先生からやさしくお作法をご指導していただくとともに、たてていただいたお茶をご馳走になりました。生まれて初めて味わうお薄は、外国の方々にも大好評でした。



生まれて初めての味 おいしい！

その後、先生にマンツーマンでお茶のたて方を教えていただき、最後に挑戦。みんな真剣そのものでした。

このセミナーは、初めから終わりまでなんとも言えない緊張感がただよっていましたが、先生方のあたたかい心配りのおかげで、参加された方は、日本の文化の奥深

さの一端にふれたように思いました。

その後の話ですが、このセミナーに参加された外国の会員の方の中には、すぐに茶器とお抹茶を購入し、毎日ご家庭でお茶を立ててご夫婦で楽しんでいるとのことです。素敵なことです。

先生方の研修会に参加して勉強しました。

9月16日(火)本協会員西條ジェシカさんと劉圓燁さんが、習志野市教育研究会英語部会にゲストとして招かれました。

今回の部会のテーマは、「国際理解教育のあり方」でしたが、お二人は、参加された小・中学校の先生を前に学習した日本語をつかってそれぞれのお国のお話をわかりやすく説明していました。

後半、先生方と質疑応答の時間をとっていただきましたが、先生から出された難しい質問にも、具体的な事例を出し一生懸命答えていたのが、とても印象的でした。

協会では、今後もこのような機会を積極的につくり、多くの会員の皆さんにご活躍いただければと考えています。



ゲストの2人頑張りました

日本語ボランティア講師会・親睦会開催

日本語ボランティア事業は、毎週月曜(午前)・火曜(午後)・水曜(午前)木曜(夜間)土曜(午前)に行われていますが、それを支えていただいているのが、日本語ボランティアの方々です。

現在(10月31日現在)81名の方々が、22カ国からいらした90名あまりの外国人受講生に日本語を教える支援を行っています。

先日(9月24日)この日本語ボランティアの方々が、講師会(毎月1回開催しています)と共に親睦会を開催しました。

講師会では、ビデオを使った日本語学習についての提案をはじめ、11月19日に行われる講演会の報告等がなされ会員同士の共通理解が図られました。

その後行われた親睦会では、準備をされた方々のゆき

とどいた配慮のおかげで楽しいひと時が過ごせました。個性のある自己紹介からスタートした親睦会。短い時間でしたが、普段なかなかお話が出来なかった仲間の方とゆっくりお話をしたり、日本語の教え方の悩みを出し合ったりして、とても充実した時間が過ごせました。この機会をとおして親しい仲間が増えた方も多く、今後の活動に大きなプラスになるのではないかと思います。

第15回世界料理教室開催。

香港の家庭料理、いかがですか。

第15回世界料理教室(今年度第3回目)が10月31日菊田公民館調理室で開催されました。

今回は会員の楊燕媚さんを講師に迎え香港の家庭料理、「海老入りワンタン」(鮮蝦雲呑)とマンゴープリン(芒果布甸)・チャーシュー・香港風焼きそば(羌葱蠔油撈麺)を教えていただきました。



海老入りワンタンとチャーシュー

講師の先生のユーモアあふれる説明を聞いたあと、18名の参加者は早速料理にとりかかりました。今回は男性が3名参加しましたが、なかなかのお手並み。2時間あまりで、お料理は、次々と完成しました。最後にみんなで会食をしましたが、どの方も大満足。今回のお料理のレシピについては、本協会のホームページに掲載させていただきます。是非ごらんいただきご家庭で挑戦してみてはいかがでしょうか。



マンゴープリンに挑戦(右から2人目が楊先生)

N.I.A.Youth / 富士山バスツアーフジさん

こんにちは。青少年部会です。今日は10月11日（土）の「富士山バスツアーフジさん」について書きたいと思います。

今回は、ガーナ、カナダ、エチオピア、アメリカ、フィリピン、コロンビア、中国、インドネシアなど、日本人を含めると合計9カ国の出身の方々や小さいお子さんがたくさん参加し、当時は朝6時半という早朝から出発しました。残念ながらお天気にはあまり恵まれず、雲の多い空模様でした。渋滞に巻き込まれ、予定よりも遅れての富士山到着でしたが、その間みんなでゲームをしながら自己紹介をしたり、ドラえもんのビデオを観たりしました（笑）。



バスの中での楽しい自己紹介



富士山をバックにちょっとおすまし

河口湖や山々を名残惜しそうに見つめながら、私達は時間通りに習志野に到着しました。帰りはみんな疲れたのか眠っている方が多かったようです（笑）。

今回のバスツアーフジさんはとても楽しかったです。富士山を肌で感じたり河口湖の水面を眺めたりと改めて日本の美しさを感じさせてくれ、日本の文化に触れることのできたステキなバスツアーフジさん

青少年部会は毎月第2土曜日にSSサロンを開催しています。12月（12月13日）は、クリスマス会を開きます！皆さん是非参加してね☆☆

富士山の近くにやって来ると、天気も回復し富士山の頂上が顔をだしてくれました。バスガイドさんが富士山の話や周辺の富士五湖についての説明を子どもにも分かりやすく教えてくださいました。

富士山五合目に到着してバスから降りた私達はたくさん上着を着込み、それでもまだ「寒いよ～」を連発していました（笑）。五合目では、全員記念の鈴をもらったり、お土産を買ったりしました。外国の方は初めて近くで見る富士山の雄大な姿に見入り、何枚も写真を撮っていました。

次の目的地では富士山のふもとの「蓬莱屋」というところでほうとうを食べました。家でほうとうを食べる機会はなかなかないので、みんなおいしそうに、そして残さずに食べていました。寒い五合目から下りてきた私達にとってあったかいほうとうのお昼ごはんは最高でした！！

その後は時間の関係で全員河口湖付近のハープ館やティベア館などを楽しみました。そこでみんなお土産を買ったり、ゆっくりと散歩したりしていました。

やがて習志野に帰る時間になりました。バスの車窓から見える



影の功労者、青少年部会員で～す！

会員紹介／こんにちは、コ・ン・ニ・チ・ハ／みなさん、どうぞよろしく！



リアン コロナ (アメリカ合衆国出身)

私は日本が不思議なパラダイスと思いました。美しい国、人々は親切です。その上さまざま
な魅惑的な習慣があります。建築物からピザの味まで、私が住んでいるニューヨークとすべて
が異なります。公立学校には制服がありませんし、殆どの人々が通勤・通学に自転車を利用し
ません。他には野菜も大変安いです。
数ヶ月前に日本に到着しましたが、室内用上履き、布団での睡眠、街路表示のこと、何
の食事でも箸を使用すること等々、そう抵抗なく受け入れることができました。歴史や信じる
ものが異なることから、日本文化に順応する数々の困難さはあります。例えば、個人主義の理
解、男女の役割、そしてミニケイションの方法は典型的なニューヨーカーと大きく異なります。向こうでは、
一般的に個人がグループより優先されます。女性は男性と同じ役割を分担するよう志向しますし、人々の言動や行動
は大変ストレイトです。多分、私が日本で直面している最も大きな問題は言葉の障害です。幸運にも、
習志野国際交流協会の親切により、日本語の勉強をはじめる機会を得ました。会話が上手にいかない時でも、ピート
ルスの歌詞を題材にすると、ミニケイションが取れることが驚きですね。

Yoroshiku!

Nicholas Sebastien Plante (カナダ出身)



Hello Narashino-shi, my name is Sebastien Plante and I come from Canada. I grew up in a city halfway between Toronto and Niagara Falls called Burlington. Burlington is the Canadian sister city of Itabashi-ku. When I was younger my family was a host family for many 5 students and hosted a few teachers. Our guests had taught us many things, such as how to use hashi and the proper way to mix shoyu and wasabi for sushi. I was also honoured to be a guest to the chakai tea ceremony with one visiting sensei, I had an enkai with a boy named Ko and learned my first Japanese word from a girl named Ayumi. That word was "yatta!". After high school I moved to Hong Kong where I worked as an English Language Teaching Assistant in a high school. In Hong Kong one of my Chinese friends who practiced calligraphy taught me how to write Kanji using the brush and stone. After nine months in China I went to McMaster University in Hamilton, Ontario where I studied Biology but also took many courses in Linguistics. I already speak fluent French, but to help my studies I also learned literary Sanskrit for one year, and because of my past in Burlington, I also decided to take one and a half years of Japanese. Many people have asked me why I decided to move to Japan, but I never really thought about it. After everything that I had done coming to Japan was an obvious next step. While living here I want to improve my Japanese and give back to Japan at least as many experiences as I had received when I was younger. I feel lucky to be living in such a wonderful city and working with such interesting people and I hope you feel the same about me.

みんなのおかげで毎日が充実しています



フクオカ・クリスティナ (フィリピン出身)

克里斯ティナさんは、本協会の日本語ボランティア事業に毎週月曜日参加されています。彼女の日本語に取り組む姿勢は、非常に熱心で担当している日本語ボランティアの方も感心するほどです。そこで先日、日本語の学習の後、いろいろとインタビューをしてみました。「私は、フィリピンで主人と結婚し、日本には2年前にきました。現在子どもが3人いますが、今4人の子が、おなかの中にいるんです。予定日は、2月29日なんですよ。もし予定通り生まれたら、この子の誕生日は、どうなるんでしょうね。」と嬉しそうに日本語で話されました。「私は、日本に来て良かったと思います。この2年毎日が楽しく、いやだと思ったことはほとんどありません。これも家族や周りの人達が、やさしくしてくれるからだと思います。感謝しています。これで日本語が、うまくなれば、もっとよいのですが・・・。日本語は、難しいです。これからもがんばって勉強します。」「日本食は、どれもおいしいですね。納豆も大好きです。フィリピンの食べ物もおいしいですよ。豚肉といろいろな野菜で作るシニガンスープは、皆さんにぜひおすすめしたいですね。」短い時間でしたが、一生懸命日本語を使って自分の気持ちを伝えようとするクリスティナさんの姿勢には、とても好感がもてました。

Letsチャレンジ／ザ・英文クロスワードパズルNo.64/プレゼント付！

〈Across〉

- Become or make different.
- A fatty or greasy liquid substance obtained from plants, or minerals, and used for fuel, lighting, food, medicines, and manufacturing.
- A word expressing connection and used to join words, phrases, etc.,
- Unmixed with any other substance, etc.,
- Chemical symbol for Niton.
- To — or not to —, that is the question.
- Be ready to start — soon — you get a phone.
- The religion of the Moslems.
- Arabian city, place of religious pilgrimage for Mohammedans.
- About
- New England
- Chemical symbol for Calcium.
- Speak wildly, violently, or boastingly.
- His (or Her) Majesty's Ship.
- Excessive interest in oneself.
- Mild and patient

〈Down〉

- Covered or roofed vehicle for delivering goods by road.
- Prefix meaning opposite, against, counter.
- Royal Dragoons
- Oxford University
- Irish Republican Army
- Not so much (in amount), a smaller quantity or degree of.
- State of freedom from war and disorder.
- Blend. —, —,
- Service Men
- Master of Ceremonies
- , dared, dared,
- Highest point
- A sack or pouch for holding things.
- Seek an answer to (a question).
- Opposite of YES.
- , his, him,

1	2	3		C	4	5	6
7			E		8		
9			10		11		
	12	B	13		D		
15		16			17		
18	19		20		21	22	
23		24		25	F		
26			27				

〈出題者〉 御園生 馨 (編集部)

〈応募要項〉

クロスを解いたあと、A~Fの文字をつなげてできたことばが正解です。

解答と住所、氏名、年齢、職業、電話番号、本誌の感想等を書いて送って下さい。解答は、ハガキ、FAX、Eメールで1月末日までお送り下さい。

正解の中から抽選で5名の方に、図書券をプレゼントします。

「N.I.A.スクウェア」編集部まで。

たくさんのご応募お待ちしています。

姉妹都市 タスカルーサ市「桜祭り」“作品募集”

タスカルーサ市では、毎年3月から4月にかけて、日本文化の紹介と姉妹都市交流をテーマに「桜祭り」が行われています。毎年、本市からも俳句や絵画のコンテストに作品を出品しています。2004年の桜祭りにも習志野市民や学生の皆さんの参加を期待しております。是非ご応募ください。

俳句部門

テーマ：飛躍、ひやく

1人3首まで（応募用紙は事務局にあります）

絵画部門 「ヤングアーティスト・コンテスト」

テーマ：Coming together to build a better world

(みんなでよりよい世界をつくろう)

対象年齢：13才～18才

画用紙A3版を使用し、水彩、クレヨン、インク等使用

作品に、名前、住所、学校名、学年、電話番号を記載

締切日は、2004年1月末。N.I.A.事務局まで送付、

または持参して下さい。

(姉妹都市交流部会)



編集後記

*どれほど科学や医学の技術が進歩しても、「人の心」が介在していかなければ、それは活かされているとは云えないでしょう。
(A.K.)

*マニフェスト（政権公約）。もとはイタリヤ語の「宣言」からきているとのこと。英語ではManifesto。11月の衆議院選挙では、与党も野党も競って使った外来語。有権者の理解度は果たしてどうだったのかしら？
(K.M.)

*サウジアラビアと言えば油の事が頭から離れません。石油会社に居たからだけではなく、戦争中油が無く航空燃料を「松根油」で賄ったと言う話は、忘れようとしても忘れられません。松の根からこの油の抽出に関わった先輩の顔が思い出されるからです。今昔の感を禁じえません。
(Y.T.)

*This is a chance to praise individuals especially the ones who have rendered services like teaching & others related, here in Japan. More power to you! And since it's almost year end too, hope everyone has their goals for the coming year.
(J.S.)

前回の解答

〈解答〉 JAKARTA

J	A	M		J	A	V	A
U	N	I	T		G	E	T
N	D		H	O		R	E
K		D	E	C	A	Y	
	G	A	M	E	S		P
T	I		E	A		T	A
E	R	A		N	A	I	L
A	L	P	S		H	E	M

当選者

内田 民江さん 小野寺夕季さん

富田 康子さん 廣田 佳代さん

森井真理子さん 正解者は11名でした。

N.I.A.スクウェア・第64号

発行2003年12月1日/発行責任者・白鳥 純

編集・習志野市国際交流協会

編集責任者・館川 裕

〒275-0016 千葉県習志野市津田沼5-12-12

サンロード4F

TEL/FAX 047-452-2650

<http://www1.seaple.ne.jp/nia>

<Eメール> nia@seaple.ne.jp